〝長州ファイブ〟に学ぶ青年の志

九月四日から、イギリスに来ています。このメッセージは、ロンドン市内のホテルで作成しています。日本の猛暑のことをすっかり忘れてしまうほど、こちらは寒さを感じる日々です。今朝もハイドパークとケンジントンパークを散歩しましたが、公園の中は既に秋の装いです。それどころか、吹いてくる風に冬の寒さを感じました。

〝世界から目を離すな〟

今回は、前半、イギリスの一部である北アイルランドを訪問し、後半は、ロンドンで、〝三日間のロンドンセミナー〟を開催しました。日本からの参加者は、私の主宰する志ネットワークのメンバーと、『青年塾』の出身者が中心で、総勢三十二人でした。

このツアーの最大の目的は、〝世界から目を離すな〟です。

とかく、社会が成熟化して沈滞し始めると、人々が内向きの考え方をするようになることは、歴史の一つの真実のように思います。事実、日本では、若い人達の間で留学する人が激減していると聞きます。また、多くの国民は世界に雄飛するような考え方や挑戦の意欲を失い、「この先一体どうなるのだろうか」と、自らの先行きの不安感にさいなまれます。そして、みんなの意識が内向きになればなるほど。社会はますます活力を失い始める気がしてならないのです。

こういう時だからこそ、「世界に目を向けよう。そして、世界の中の日本といった立場に立ち、〝我、何を成すべきか〟といった、大きな考え方を持とうではないか」というのが、主催した私の切なる思いです。幸い、その私の思いに呼応して参加してくれた若い人も十人近くいました。うれしいことです。やがて、『夢甲斐塾』からも、参加しようと手を挙げてくれる人が出ることを心待ちしています。

死罪も覚悟して密航し、ロンドン大学に留学

今年は、長州藩（山口）の若者五人が、イギリスに留学して近代文明を学び取ろうと密航して、ちょうど百五十年目です。当時、鎖国下の日本にあって、密航は、死罪です。二十代の青年達が、死を覚悟して、ロンドン大学に留学したのです。しかもその五人が、近代日本をそれぞれの分野で開いていきました。

伊藤博文は、日本の最初の総理大臣になりました。また、井上　馨は、最初の外務大臣です。また、井上　勝は、新橋と横浜間に日本最初の鉄道を開通させ、〝鉄道の父〟としてその名を残します。山尾庸三は、工業教育に力を入れ、後の東京大学工学部の創設に尽力します。さらに、遠藤謹助は、後に造幣局を作ります。

※裏のページに続いています→

密航した当時、彼らは皆、二十代です。一番年長の井上　馨でさえ、二十九歳、最年少の井上　勝は、二十一歳でした。しかも彼らは、選び抜かれたエリート候補生ではないのです。一地方の藩の青年達ばかりです。「しょせん私達は、田舎の平凡な、名もない若者にすぎない」とは考えなかったのです。一地方にあっても、『志』においては、日本の近代化をひらいていく先駆者だという誇りと気負いを持っていました。

歴史を変えるのは、中央のエリートではない

私は、長州ファイブの物語を知るにつけ、『夢甲斐塾』もまた、それに負けない気概を持ちたいものだと思いました。自分自身の価値を、自分自身で低くしてしまってはいけないのです。「私は、しょせん山梨の平凡な一人に過ぎない」と考えてはいけないのです。「立場は、一地方の一介の平凡な人間であっても、気概においては、これからの日本の新しい可能性をひらいていく」といった『志』を持ちたいものです。

今回、半日、彼らが留学していたロンドン大学を訪ねました。オックスフォート大学やケンブリッジ大学ではなく、ロンドン大学を留学先に選んだのは、当時のオックスフォード大学やケンブリッジ大学は、クリスチャン以外を受け入れなかったのです。

ロンドン大学の中庭には、黒い石の碑が立っていました。そこには、五人の名前が刻まれていました。さらに驚いたことは、五人と並んで、二年後に留学した薩摩藩の青年達の名前も、多数、刻まれていたことです。幕末、長州や薩摩は、密かに若い人達を、国禁を破り、密航させていたことです。一方では、外国人を叩きのめせと「攘夷」を叫びながら、一方では、西洋の進んだ近代技術をしっかりと学ばせていたのです。長州藩や薩摩藩が、やがて天下を取るはずです。

諸君の心意気と気概に大いに期待

『夢甲斐塾』もまた、歴史に残るような役割を果たしたいものであると、私は、ロンドン大学の中庭にある黒い石の碑を見ながら、ひとり、胸の内に期していました。

帰国早々に、『夢甲斐塾』の例会が開催されます。私も、もちろん参加します。諸君と膝を付き合わせて話すのは、これが初めてです。また繰り返しになりますが、「全員参加」の宿題の結果を楽しみにしています。「みんなが参加して、たとえ瞬間であっても、一堂に顔を合わせるにはどうしたら良いか」について、知恵を絞ってください。

それこそが、大切な学びのテーマであります。人間の営みの中で、みんなが力を合わせるにはどうすべきか、そんな大切な課題の探求にもつながっています。だから、「全員参加」は、全員で取り組む最初の研修テーマととらえてください。

それでは、諸君とお目に掛かれることを楽しみにして、これから帰国の途に就きます。(ヒースロー空港の三番ターミナルの待合室にて)。

『夢甲斐塾』
塾長　上甲　晃